

日朝合作映画『バード』(1992)に見る統一言説とジェンダー  
～ナラティブ分析を中心に～

山下 英愛

**Narratives on Gender and Reunification of Koreans in *Bird*  
a Japanese-North Korean Co-production:**

Based on the Narrative Analysis

Yeong-ae Yamashita

*Bird* (1992) is a Japanese-North Korean co-produced film funded by CINEMABEAM in Japan and produced by Art Film Production Studio in North Korea. The story is based on the true story of a real North Korean ornithologist, Won Hong-gu, and his son, Won Byeong-oh, who were separated by the Korean War. It depicts the irrationality of division and the desire for reunification of the two Koreas. Migratory birds freely crossing the sky are compared with the father Hong-gu and the son Byeong-oh who cannot meet or study birds together due to the Military Demarcation Line.

This article first introduces the outline of the true story on which the film was based. It explores characteristics of the novel and the film narratives created from the story. Next, it examines how the narratives of knowledge succession and reunification are genderized in the film. The narrative on succession of ornithological research from father to son contains ideas of patriarchal order and ideas. In addition, the gender roles of father and son who devote themselves to ornithological research and of women (mother and daughter) who support the men constitute a narrative on reunification. Here, comparing it to the narrative of the novel, I emphasize the gender characteristics of the film. By analyzing the narratives of *Bird*, I demonstrate an aspect of the gender roles of North Korean society in the early 1990s.

はじめに

本論文で取り上げる映画『バード (Bird)』<sup>1</sup>は、日本のシネマビーム<sup>2</sup>が資金を提供し、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の朝鮮芸術映画撮影所が製作した日朝合作映画である。内容は、実在した北朝鮮の鳥類学者である元洪九<sup>ウォンホング</sup>（1888～1970）と、朝鮮戦争によって離れ離れになったその息子の元炳旣<sup>ウォンビョンオ</sup>（1929～2020）の実話をモチーフにしている。南北の空を自由に行き交う渡り鳥と、軍事境界線に阻まれて自由に会うことも研究することもできない鳥類学者の父子の物語を対比させながら、分断の理不尽さと南北統一への願いを描いたものである。

筆者がこの映画を取り上げることにした理由は3つある。一つは、この作品を偶然入手して視聴することができたこと<sup>3</sup>、二つ目は、内容的に北朝鮮、韓国、日本の三か国にまたがる数少ない作品であること、そして、近年韓国でも上映され<sup>4</sup>、いわゆる統一を表象する作品として注目されたことである。本論文では、このユニークな映画のナラティブと人物描写をジェンダーの視点から分析し、1990年代初頭の北朝鮮における統一言説がどのようにジェンダー化されていたのか、について探究してみようと思う。朝鮮半島を含む東アジアの平和的共存を考える上でジェンダーの観点は重要であり、北朝鮮社会のジェンダー観を理解するための参考にもなるだろう。

ところで、この父子の物語は日本人の遠藤公男<sup>5</sup>が著した『アリラン

---

1 脚本：金世崙、監督：リム・フン（林昌莞<sup>リンチャングワン</sup>の別名）。朝鮮語タイトルは『州（鳥）』。  
 2 シネマビームは、徳間、博報堂、エフエム東京の3社が立ち上げた新人監督育成プロジェクトである（『特報 徳間、博報堂、エフエム東京が狙う シネマビームプロジェクト世界の“新人監督発掘計画”』『日経エンタテインメント』1992参照）。  
 3 本学文学部のローガン・リチャード教授がテレビで放送された『バード』の録画映像（日本テレビ1995年9月19日）を提供して下さった。  
 4 2019年8月、第1回平昌国際平和映画祭の開幕作に選ばれて、韓国で初めて公式に上映された。ただし、1993年4月に「北朝鮮を正しく知る運動」の一環として非合法的に試写会が開かれたことがある（『ハンギョレ新聞』1993年4月4日）。

の青い鳥』（1984年）によって詳しく紹介された<sup>6</sup>。北朝鮮ではその2年後、元洪九の鳥類学研究に焦点を当てた映画『巣（보금자리）』<sup>7</sup>が製作上映されたが、ここには韓国にいる息子の話は出てこない。緊張関係が続いていた当時の北朝鮮と韓国では、南北に関わる物語を芸術作品にすることは難しかったと思われる<sup>8</sup>。

映画『バード』が製作されたのは、その後、韓国の民主化（1987年6月）と冷戦の終結により、南北関係に変化の兆しが現れてからである<sup>9</sup>。このような融和的な雰囲気が漂う1990年に、この父子のストーリーをかなり忠実に描いた林<sup>リム</sup>ジョンサン<sup>10</sup>の短編小説「シベリアムクドリ—取材手帳を開きつつ」が北朝鮮で発表された<sup>11</sup>。映画『バード』は事実上こ

5 遠藤公男（1933年～）は小学校の元教諭であり、かつ動物学や鳥類の研究者でもある。

6 遠藤は元炳旣に直接聞き取りをして本書を執筆した（「あとがきにかえて」参照）。遠藤は1960年に東京で開かれた国際鳥類保護会議に出席するため来日した元炳旣に会い、元洪九・炳旣の家族史に関心をもったという（李ジユヒ「編集者後記」韓国語版2017：216）。遠藤の本は2017年に韓国でも翻訳出版された。

7 朝鮮芸術映画撮影所大興団創作団製作。脚本：咸ホンジュン、演出：金吉夏。この映画は、鳥類学者のユ・ジン（元洪九）らが、天然記念物に指定されている稀少種のキタキ（*Dryocopus javensis*）の棲息地を探し出し、保護する過程を描いたものである。ユ・ジンらが棲息地をつきとめて平壤に戻る途中、研究所の所長が車でやってきて、金日成主席がキタキの生息地を特別に保護することにしたと告げられ、一同が感動する場面がハイライトとして挿入されている。北朝鮮では1968年にキタキを天然記念物に指定し、保護区を設置した。キタキ生息地の探索は、1970年に亡くなった元洪九にとって最後の仕事だったのかも知れない。映画は、主人公ユ・ジンが棲息地を発見した後でそのことについて論文を書き、国際学会で発表するために飛行機で飛び立つ場面で終わる。このラストシーンは、本稿で取り上げる映画『バード』のラストシーンとそっくりである。

8 この父子の物語そのものについては、韓国でも紹介された（河柳美：1984）。

9 韓国では、1989年には政府統一部傘下に北韓資料センターが開設され、一般の人々も制約つきながら北朝鮮の資料に触れられるようになった。学生や市民の間では先述の「北朝鮮を正しく知る運動」が起き、韓国の女子学生（林秀卿）が平壤に密入国して世界青年学生祝典に参加したりした。また、1991年には南北が同時に国連に加盟し、翌年には南北の女性代表団が相互にソウルと平壤を訪問した（山下2021：72）。一方、日本では1991年に東京、大阪、京都で朝鮮映画祭91が開催されており、映画監督や女優、朝鮮映画輸出入社長などが来日した（門間：233）。

10 林ジョンサン（1933年生まれ）は、朝鮮戦争に参戦した後、金日成総合大学の歴史学部を卒業（1962年）した。歴史学準博士。1960年代から70年代にかけて李朝の文化や高句麗の政治体制などに関する論文を発表したが、その後、小説家に転身した。この小説は韓国でもいち早く紹介されている（『北韓優秀短編選1シベリアムクドリ』1993）。その他、彼が脚色した『安重根、伊藤博文を撃つ』も韓国で2006年に出版された。また、朝鮮時代を背景とした歴史小説『朔風』（2000）は、初めての南北合作ドラマ『死六臣』（2007）の原作小説であり、韓国でも出版された（2006）。

の小説を原作としている<sup>12</sup>。

映画化の経緯についても簡単に記しておこう。シネマビームは1990年12月末、CILECT（世界映画TV学校連盟）を通じて世界36か国の大学等に募集要項を発送し、91年4月時点で18か国から83作品の応募があった。『バード』は最終的に選ばれた6作品の中に含まれた<sup>13</sup>。北朝鮮の映画が選ばれたのは次のような経緯がある。徳間的小林正夫（このプロジェクトのチームディレクター）が、それ以前から在日朝鮮人総連合会（総連）を通して北朝鮮映画に触れており、その中でも、アクションものでエンターテインメント性が高い『快傑 洪吉童（흥길동）』（1986）が印象に残っていた。そこで、総連の関係者にこの映画の監督のような人がいればよいと伝えたところ、『バード』の台本が送られてきたという<sup>14</sup>。また、この鳥類学者のエピソードも新聞記事を読んで知っていた<sup>15</sup>。それで、この内容が「国際的にも通じる内容だと感じ」て、採用することにしたという<sup>16</sup>。

本稿では、まず映画の土台となった実話の概要と、それをもとにして創作された小説と映画のそれぞれのナラティブの特徴について述べる。次に、「跡継ぎ」と「統一」に関するナラティブがどのようにジェンダー化されているかを考察したい。「跡継ぎ」ナラティブとは、父か

11 ちなみに、シベリアムクドリは和名、学名はSturnus sturniusである。また、北朝鮮と韓国でのハングル表記は若干異なっている。末尾の参考文献を参照。

12 脚本を書いた金世崙（1928年生まれ）は1962年から朝鮮映画文学創作社の作家として活動した。金も朝鮮戦争によってソウルにいる母親と別れた離散家族であり、その痛みを『血肉』（1979）で描いた（ソン・グァンス2003：75）。

13 選ばれたものには製作費約1億円が与えられた。前掲『日経エンタテインメント』5～6。

14 電話インタビュー、2020年3月28日。「快傑 洪吉童」の脚本も金世崙が書き、『バード』の演出を担当したリム・フンは「快傑 洪吉童」の副演出を担当した。また、『バード』に関しては当時徳間ジャパンに勤めていた李鳳宇氏が担当し、シナリオ作業と編集を含めて3回平壤に向向いて打ち合わせをした（李鳳宇氏へのメールインタビュー：2020年3月29日）。

15 日本では『河北新報』（1966年5月14日5面）に「ソウルで放ったコムドリ 平壤の父の手に 奇跡の消息もたらず」との見出しで北朝鮮の家族の写真も添えて報じられた。

16 小林氏はこのプロジェクトの目的を、「観た後で生きる喜びを感じさせる映画」を作ったかったとも表現している（2018年11月28日）。

ら子への鳥類学研究的の継承に関わるもので、家父長的な秩序や考え方が内包されている。また、鳥類学研究に邁進する父子と、それを支える女性たちという性別役割によって「統一」ナラティブが成り立っていることを論じるつもりである。ここでは小説のナラティブと比較することで、映画のジェンダー的特徴を浮き彫りにしてみたい。

この映画についての論評は、映画研究者の門間貴志がその著書の中で行なっているが（2012、234-235）、今のところその他には見当たらない。また、韓国における北朝鮮映画研究においてもほとんど言及されていない。脚本家の金世崙に関する研究の中でわずかに触れられている程度である（李ミョンジャ：2008）。なお、執筆にあたっては作品の映像、小説、北朝鮮の雑誌論文などの一次資料を用いたほか、当時シネマビームのチーフプロデューサーだった小林正夫氏へのインタビューを行った<sup>17</sup>。

## 第1章 実話と作品の概要

### 1. 実話<sup>18</sup>の概要

この映画のモチーフになった父子の家族史について、遠藤公男の前掲著書を参考に簡単に紹介しておこう。

まず、父親の元洪九は1888年、平安北道朔州に生まれた。水原農林学校を卒業後、23歳の時に第1回留学生として鹿児島高等農林学校に留学。1915年に帰国後、開城、安州、咸南などで教鞭をとりつつ鳥類の研究を行なった。1920年、農家出身の崔元淑と教会で結婚式を挙げ（二人ともクリスチャンであった）、息子4人と娘2人が生まれた<sup>19</sup>。1934年にその

<sup>17</sup> 面談によるインタビュー3回（2018年7月14日、11月28日、2019年3月14日）と電話インタビュー2回（2020年3月28日、2021年12月19日）。

<sup>18</sup> ここでいう「実話」とは、遠藤の本とその韓国語版に書かれたものを中心にしており、その意味は限定的である。2017年に出版された韓国語版は、日本語版の誤りも正している。

間の研究をまとめた「朝鮮の鳥類目録」を発表し、鳥類研究者として知られるようになる。解放（1945）の翌年、金日成総合大学が設置されると教員として迎えられ<sup>20</sup>、それまでコツコツ制作した鳥の標本約4000点を大学に寄贈した。

末息子の炳旣は子どもの頃から父の影響を受けて鳥に関心を持った。1947年、父の跡を継いで鳥類学者になろうと金日成総合大学の農学部に入學。翌年、単科大として分離された元山農業大学で学んだ。在学中の1950年に朝鮮戦争が勃発すると、20歳だった炳旣は大学を繰り上げ卒業して北朝鮮軍に入隊させられた。当初は平壤や水原に派遣され、建物の警備にあたったが、9月、マッカーサー率いる国連軍が仁川に上陸すると一気に北朝鮮軍は後退を余儀なくされ、炳旣も平壤近郊の両親の避難先に身を隠した。その後、戦禍がひどくなる平壤を一時的に離れるために、炳旣は二人の兄（長男と三男）と3人で避難民に混じって南へ向かう。原爆投下の噂が流れ、国連軍とともに南下するしかなかった。しかし、これが両親との最後の別れとなった。

北朝鮮軍の「逃亡兵」の身分だった炳旣はその後、韓国軍に入隊した。金日成総合大学に学び外国語に堪能であることが知られて司令部勤務となり、後の大統領となる朴正熙大佐の副官となる。休戦（1953年7月）後も軍人を続け、砲兵学校を出て陸軍大尉にまでなった。だが、戦争によって危機に瀕していた野生動物のことが心配で、その保護の必要性を訴える文書を新聞に投稿した。それがきっかけで、1955年、農林部中央

<sup>19</sup> 長男は防疫獣医。次男も防疫研究所の研究者だったが、解放後、日本人に間違えられて殺された。三男は平壤医学大学に進み医者となった。娘の一人は生後間もなく亡くなっている。物語に登場する炳旣は1929年生まれの子息である。

<sup>20</sup> その後、植民地時代の親日派を洗い出す動きがあり、洪九は抗日運動に参加しなかったとしてしばらく教壇に立つことは許されなかった。植民地時代の教え子の一人だった鄭準沢（後に副総理になった）が、洪九が多くの子生をかばい、励ましたことを大学当局に伝え、ようやく生物学の講義を行なうことができるようになった（遠藤：133）。

林業試験場で働くことになり、軍服を脱いだ。その後、日本の学会や研究所、博物館から資料を取り寄せ、韓国の野生動物のガイドブックづくりに取り組むとともに、慶熙大学で生物学を学びなおして1957年に卒業した。卒業後、京都大学の徳田御稔教授の助けを得ながら博士論文を執筆し、1960年に北海道大学に提出、同年12月博士学位を授与された（遠藤〔韓国語版〕224、注57）。その後、韓国の慶熙大学の生物学教授となった。

この父子が互いの消息を知るきっかけとなったのは、足環を付けた鳥がソウルから平壤に飛び、そこで発見されたことである。大学教員になった炳昨は、1963年にソウルの森で繁殖した約100羽のヒナに調査のために足環をつけて放した。その内の一羽だったシベリアムクドリが約200キロ離れた平壤の万寿台で発見され（怪我をして飛べずにいた）、当時科学院生物学研究所所長だった洪九のもとへ持ち込まれた。日本製の足環をつけていたことから、洪九は渡り鳥研究の国際的ルールに従って日本の山階鳥類研究所に経緯をたずねる手紙を書いた。日本には棲息していない鳥に日本製の足環が付いていたことも気になった。手紙はモスクワ経由で日本に届けられた。山階鳥類研究所は足環について調べ、国際会議で来日した代表を通して韓国の農事院に贈られたものであることが判明する。さらに農事院に問い合わせたところ、足環を付けたのが、元炳昨であることが分かるのである。直接電話をすることも手紙を送ることもできないため、第三国を経由してやり取りする必要がある、真相が明らかになるまでに足掛け3年の時間を要した。

こうして朝鮮戦争以来、行方の知れなかった父子は足環をきっかけに互いの消息を知ることができた。当時、このエピソードは北朝鮮、韓国、日本、米国、中国、ソ連など各国で報じられた。しかし、再会はかなわぬまま、洪九は1970年に82歳で亡くなった。炳昨が父母の墓参りのため

に平壤を訪問することができたのは、32年後の2002年である。北朝鮮では洪九の孫娘（次男の末娘）の婿が鳥類学研究的跡を継いだと報じられた（『朝鮮日報』2007.3.5）。

## 2. 小説と映画のナラティブ

### 1) 小説「シベリアムドリ」（1990）

林ジョンサンの短編小説の概要は以下の通りである。

この小説の語り手は50代の記者である。記者はある日、大学時代の同窓で動物学研究所の鳥類学の専門家である元チャンウンの家に招かれ、彼の書齋で話を聞く。チャンウンは、20年前に亡くなった世界的名声をもつ鳥類学者、元ホンギル教授の孫である。チャンウンが友人の記者を家に招いたのは、ソウルに暮らす鳥類学者の叔父、元ピョンフに宛てた長文の手紙を読んでもらうためだった。

チャンウンが叔父に手紙を書くことにしたのは、日本の鳥類研究所の吉原から叔父と撮った写真が送られてきて、手紙を書くことを勧められたからである。そこで、チャンウンは10歳の時に別れたきりの叔父に、約40年間の家族史を、特に叔父の父親でありチャンウンの祖父であるホンギルの生涯を、叔父に知らせる形で書いている。読み手は、手紙の中のチャンウンの語りによって自然とホンギルの人生の中に吸い込まれてゆく。

小説は、実話とは違って孫のチャンウンを鳥類学者に設定し、祖父、叔父と叔母、そして私（チャンウン）という三代の血筋と鳥類学のつながりを重ねている。エピソードの前半は、1934年にホンギルとその幼い娘と息子（ピョンフ）が朝礼の最中に頭上を鳴きながら飛ぶ鳥を追いかけて巣を探し出し、「鳥を観察する父と娘」と新聞記事で報じられたこと、1947年にホンギルが大学教員となり、末のピョンフが元山農業大学



に入学するなど慶事があったこと、ところが、朝鮮戦争によって、鳥類研究の跡継ぎと信じていたピョンフら息子たちと離れ離れになってしまったこと、その失意の中にあったホンギルを金日成が慰めて研究を支援してくれたことなどが語られる<sup>21</sup>。後半は、韓国でピョンフが出版した鳥類の本を見たホンギルが、北で先に発見されたことが書かれていないことに激怒したことや足環のエピソードなどが書かれているが、それらが、分断による鳥類研究の不完全さとホンギルの研究者としての道徳性の高さ結びつけて語られている。そして臨終が近づいたホンギルの行動と遺言の場面も丁寧に描き、最後に再び記者の語りに戻って終わっている。

## 2) 映画『バード』（1992）



映画の一場面

小説が孫のチャンウンと記者の語りで構成されて、南にいるピョンフを登場させていないのに対して、映画には北の尹炫九（元洪九）とその家族、南にいる息子の尹明晔（元炳晔）とその家族、そして日本の鳥類研究所所長も登場する。

ストーリーは、炫九が助手たちを連れて各地を調査するエピソード、日本製の足環を付けたシベリアムクドリを通して炫九と明晔がそれぞれの消息を知るに至る経緯、そして、互いの生存を知ったあとで、二人とも一層研究に邁進する姿を描く。そして最後に、二人が研究成果を発表するために国際会議に招待され、劇的な出会いを予感させて終わる。

<sup>21</sup> 1993年に刊行された韓国版では、金日成が登場するエピソードや統一を妨げるものとして米国に言及している部分がすべて削除されている。

映画は日本との合作だったこともあり、ストーリーの展開をめぐって日本と北朝鮮の関係者との間で議論があった。例えば、「北朝鮮側は、父が病院で息を引き取る場面を入れたり、「(南北分断は) 南が悪い」と主張を込めたせりふを入れようとしたりしたが、日本側は「あまりにも希望がない」と反対し、一時は合作すら決裂しかけた」<sup>22</sup>という。

また、映画では炫九の助手と孫娘との間の恋愛も挿入されている。これは後述のように炫九の鳥類学研究的の跡を継ぐ者としての設定である。小説とは違って、映画は視覚的に観客に訴える特徴があるせいか、表象面でもナラティブの面でもジェンダー化の度合いが強まっている。以下で詳しく見てみよう。

## 第2章 ナラティブの家父長制的性質

### 1. 「跡継ぎ」ナラティブ

#### 1) 小説：血筋による「跡継ぎ」

小説のストーリーに含まれる家族史のエピソードは全体的に実話に近い設定となっており、「鳥を観察する父と娘」というエピソードも挿入されている。跡継ぎについては「祖父様、叔父様、叔母様、そして私に至るわが家門の三代が、血肉のみならず鳥類学というもう一つの強い絆で引き継がれてきた」(66) とし、家門の血筋が強調されている。ここでは洪九の娘もまた鳥類学の跡継ぎに位置づけることによって、家門の家父長制／男性中心性よりも血筋を強調しているのである。小説の中に登場する三代目の跡継ぎが、実話とは違って祖父ホンギルの孫（次男の息子）であるチャンウンになっていることも、血筋を強調することにつ

<sup>22</sup> 「南北離散家族の悲しみ・希望 映画に 初の日朝合作『バード』完成」、『朝日新聞』1992年12月2日夕刊。ちなみに、最近確認した北朝鮮バージョンには、父が病院で息を引き取る直前に「この地から米帝を追い出して分断の障壁を崩してこそ朝鮮鳥類誌が完成する」と電話越しに息子に言う場面がある。

ながっていると言えるだろう（表1参照）。

<表1：鳥類学者の跡継ぎ比較>

世代	実話	小説	映画
1世代	祖父（元洪九）	祖父（元ホンギル）	祖父（尹炫九）
2世代	息子（元炳旣）	息子（元ピョンフ） チャンウンの末の叔父	息子（尹明旣）
3世代	孫娘の夫	孫（元チャンウン）	孫娘（サンオク）の 結婚相手（ジンス： 炫九の助手）
跡継ぎとして言及 される他の人物	娘	娘	曾孫（男子）

## 2) 映画：男性による「跡継ぎ」

これに対して、映画では跡継ぎとして男性を強調する設定となっている。三代目の跡継ぎは、小説とは違って実の孫としてではなく、より実話に近い設定（助手のジンス）となっている。しかし、映画には鳥に関心を持っていた娘は登場せず、跡継ぎに関するナラティブは以下のように“男”を強調している。たとえば、次のような会話がある。

### [場面1]（筆者訳）

祖母 「ミョンオが生きていれば、今頃はおじいさんに劣らぬ鳥博士になっていたのに」

曾孫（プニ）「あまり心配しないで。私が大きくなって鳥博士になります」

祖母 「プニが？心配するな」（目の前にいる生後数か月の男児であるひ孫を抱きあげる）



プニと両親

「ここに鳥博士の曾孫がいるじゃないか。この顔立ちを見てごらん。驚くほど曾おじいさんに似てるじゃないか」

[場面2]

祖母 (ひ孫を抱き上げた祖父に)「あなた、もう心配することはありませんよ。この子が鳥博士の代を継いでくれますから」

祖父 「この子が代を継ぐのを見るためには私が100歳以上生きなければならんな」

[場面1] では小学校高学年に見える曾孫の少女が「自分が鳥博士になる」というが、祖母はそれを無視して、目の前の赤ん坊の曾孫(男)を抱き上げ、こちらが跡継ぎになると言う<sup>23</sup>。また、[場面2]では、祖父の会話の後、実際の自分の跡継ぎにするために孫娘の結婚相手として助手のジンスを家族に推薦する場面が続く。

## 2. 「統一」ナラティブ

### 1) 統一の主体としての男性役割

小説でも映画でも、祖父が朝鮮半島に棲息する鳥類の保護と研究を行うことは、祖国愛と統一への願いを体現するものとして描かれる。小説では、南にいる息子への会いたさやなつかしさが祖父の研究の原動力の一つとなり、朝鮮の鳥類学研究の完成が統一に比喩されている。祖父は、自分が果たせなかった北朝鮮の鳥類学研究を孫のチャンウンに託しながら言う。「米帝を追い出して(南北の)壁が崩れ、統一する日、お

<sup>23</sup> ただし、日本語の字幕では朝鮮語の会話のニュアンスと少し異なっている。「お前が?(ブニが?)」の後の「心配するな」が「そうだね」と訳されており、祖母がひ孫娘の言葉を少しは受け入れるような表現となっている。また「ここに鳥博士のひ孫がいるじゃないか。」の後に「この子もおじいさんのあと取りだ。おじいさんによく似た顔をしている」となっている(下線、筆者)。

前(孫)と私、そして(お前の)叔父が研究したものを合わせれば、それが完成された『朝鮮鳥類誌』になるだろう。これが民族分断の苦痛を身をもって体験したわが元氏家門の三代が、統一の祝祭に捧げる最も尊い贈り物となるだろう」(林ジョンサン：74)。

このように自らの研究を統一への贈り物としてその努力を自らに課そうとする祖父は、学者的信念をもつ研究者としても描かれている。小説でも映画でも、祖父(ホンギル/炫九)は発見された足環が日本製のものであることに学究的な好奇心を寄せる。助手たちは、日本製の足環が、シベリアムクドリが日本に棲息することを意味するならば、祖父の名声に傷がつくと心配する。なぜなら、シベリアムクドリは日本には棲息しておらず、朝鮮半島でだけ発見されたため、祖父が「北朝鮮ムクドリ(북조선꼬리뚝리기)」と命名したからだ。だが、名声よりも学者的良心を重んじる祖父にとっては、この鳥が日本にも棲息しているということは新しい事実の発見であり、むしろ好奇心を沸き立たせることであった。研究には国境も何もないと、足環がある事実を受け入れて究明しようとするのである。

また、息子が韓国で出版した本を読んで、北の研究がしっかり参照されておらず、間違いがあることを知って、たとえ息子であっても「学者の態度ではない」と怒る、「岩盤のよう」な学者的信念をもつ存在として描かれる。ここには、南の学者(息子)よりも北の学者(祖父)の優越性を示そうとする意図があるのかも知れない。



日本からの便りを読む炫九

映画では、足環事件をきっかけに互いの生存を確かめることができた父子が、その喜びを胸に一層研究に打ち込む姿が描かれる。祖父は軍事境界線の北側で、息子は南側でそれぞれ鳥を追いかけて調査を進める。ところが、

彼らは軍事境界線に阻まれて、それ以上調査することができない。分断が彼ら父子を引き裂き、鳥の研究をも妨げている現実につきあたる。ちなみに、それを阻むものとしての米国や韓国に対する批判は小説では強く表現されているが、映画ではほとんど描かれていない<sup>24</sup>。

研究を続けた二人は、日本で開かれる国際学会で発表する機会が与えられる。研究を遂行することは邂逅に結びつき、その出会いは統一を暗示する。すなわち、炫九と明昨は統一ナラティブの主体となるのである。映画のラストは、空港から炫九が飛び立つ場面が映し出され、国際学会で二人が会えるだろうという余韻を残してエンディングとなる<sup>25</sup>。

## 2) 女性の他者化

男性たちが統一ナラティブの主体として描かれる一方で、映画に登場する女性たちは、男性を補助し、諭され、待つ存在として他者化される。祖父の妻、孫（サンベ）の妻、孫娘（サンオク）、息子（明昨）の妻、祖父のもう一人の助手（ユニ）、クアム里の村長の娘は、みな男性たちの世話や補助をする役割である。サンベの妻は一家の「嫁」として、アイロンかけなどの家事をする。孫娘（夫の妹）のサンオクの出張用の持ち物の準備も彼女の役割である。研究所の助手（ユニ）も祖父やジンス（男性助手）を補助する控えめな存在として描かれている。

それに加えて、女性たちは考え方も未熟な存在として描かれる。例えば、孫娘のサンオクは医者だが、仕方なく祖父の体調を管理するために

---

<sup>24</sup> 当初は米国や韓国を批判する内容が含まれていたが、日本側とのやりとりの中で削られた。ちなみに、YouTubeにアップされている北朝鮮バージョンは日本で上映されたものとは違って米国と韓国に批判的な内容がそのまま含まれている。

<sup>25</sup> 最後の場面に関しては日本側とのやり取りがあった。小林氏によれば、「国際学会で親子が会える設定だと嘘っぽい。映画がご都合主義の映画になってしまう。リアリティがありながら、それが生かされない」ということで最後を変えることで合意したという。そして、炫九が国際学会に出発する前夜の夢の中で明昨に会うという設定となった。

一緒に調査についてゆく。サンオクは、祖父が高齢で持病があるにも関わらず鳥の観察のために出かけるのが不満である。研究を通して自然を保護しようとする祖父の仕事の重要さが理解できない。それを男性助手のジンスが諭し、次第に改心する存在として描かれる。また祖父からジンスと結婚することを提案されて反発するが、それもジンスの話を聞きながら、次第に説得されて受け入れるようになる。

この特徴は日本人女性の描き方にも共通する。鳥類研究所の職員である田中<sup>26</sup>は所長（男）が南北の鳥類学者たちのために奔走する理由がわからない。その件でソウル出張を命ぜられると嫌な顔をしたり、友人に愚痴をこぼしたりする。その友人（女性）も、足を組んでたばこを吸いながら「研究所をやめちゃえば？」と実に無責任な人間として描かれる。田中は所長に「南北の問題に首を突っ込み過ぎではないか」と言うが、「隣の家が火事なのを放っておくわけにはいかない」と諭されて次第に改心するようになる。つまり女性は考えが足りず、男性がそれを諭すという主従関係である。

ちなみに、たばこを吸う日本人女性の表象は、北朝鮮や韓国の女性との差別化を意図しているらしい。小林氏は、「女性がたばこを吸うのは当時の北朝鮮では反社会的行為。資本主義社会の女性だからあなのだ、という風に見せる。女性のたばこは娼婦的な感覚。自国の女性への戒めでは」と指摘する（電話インタビュー）。

炫九の妻である祖母は何事にも夫に従う。夫唱婦隨の典型として描かれている。祖父からサンオクとジンスの結婚について意見を求められると、「私がいままであなたの意見にたてついたことがありますか？」と答える。「待つ」ことも祖母の役割である。祖母は夫が鳥の調査に出か

<sup>26</sup> 田中を演じたのは在日コリアン二世の梁英姫（現在、映画監督）である。代表作に『ディア・ピョンヤン』（2005）、『かぞくのくに』（2012）など。

けている間、心配しながら帰りを待ち、離れ離れになった息子と会える日を待ちわびる。すなわち統一される日を「待つ」受け身的な存在である<sup>27</sup>。

次に、女性は美的対象として設定される。特に未婚の女性／少女の服装や髪型、表情やしぐさは、美しく、かわいらしく、控え目で恥じらいのある姿として描かれる。頭にリボンをつけ、民族衣装を身にまとい、服の色もピンク系である。出張先で一行を迎える女性の姿が典型的だ。この女性はピンクのリボンにピンク色のチマチョゴリを着て現れ、炫九の体調をきづかう。小学生のひ孫娘はいうまでもなく、20代後半で医者サンオクも常に大きなリボンを頭につけている。専門職であっても未婚であるということがリボンをつける基準であるかのようだ。

この種の女性の描き方については、1991年に開かれた南北女性交流討論会で北側代表の次のような発言がヒントになる。「女性の美を強調するのは、共和国の男性たちが自分の妻が美しくあることを願っており、また、女性が美しくあってこそ社会が明るくなるという趣旨である」<sup>28</sup>。また、金日成主席は、「女性たちは自分の解放と権利平等だけを考えるあまり、朝鮮女性たちが昔からもっている固有で美しい品性を忘れてはならず、女性は女性らしくあらねばならない」と話したという（金ヒヨンスク2001：164）。1993年には、北朝鮮で「女性は花である」という歌がリリースされ、大ヒットした。

これに比べて日本人女性の描き方は明らかに対照的である。田中やその友人は未婚のように見えるが、リボンはつけていない。髪型は結わなままのロングヘアである。たばこを吸っていることも加わって、北朝

<sup>27</sup> 金ヒヨンスク（2001）によれば、南北分断後、「待つ」という素材は、南北共同の現象であり、北の『朝鮮文学史』はその主体として母親を設定していると指摘している（155）。

<sup>28</sup> ‘アジアの平和と女性の役割’ ソウル討論会準備委員会編、1992：40。



鮮式の「清らか」で「品のある」イメージと対置させているかのようである。

さらにジンスがサンオクの入浴中の裸体を見るシーンや、娼婦的イメージを持たせた日本人女性の描き方などは、女性を性的対象として他者化する典型とも言えるだろう。

### おわりに

以上に述べたように、映画『バード』が描くナラティブは、跡継ぎを「男性」中心とすることで、実話や小説よりも家父長的性質が強まっている。また、統一に関しても、それを成し遂げる主体は男性であり、女性に従属的で他者化される傾向を確認することができた。それは単にこの物語が父子を中心とする実話に基づくというだけではなく、北朝鮮社会における家父長的な慣習や性別役割の考え方、また90年代の「女性＝花」と位置付ける新たな社会的風潮の反映であると言えるだろう。

この映画に示されたジェンダー的特徴は、これまで韓国の北朝鮮女性研究で指摘されてきた女性像の特徴をすべてもっていることも確認できた。例えば、北の女性は「主体であるよりも副次的人物として描かれている。自分の立地のために生きるのではなく、社会のために働く男性を助ける立場を当然のこととして受け入れなければならず、男性によって教化される受動的存在だといえる」（金ヒョンスク：179）などである。

次に、このようなジェンダー的特徴は原作小説よりも映画により鮮明に表れていると言えるだろう。それは立体的に描き出す映像メディアの特徴と言えるかも知れない。また、日朝合作映画として内容面での日朝間議論はあったが、ジェンダーの描き方に議論があったという話はない。そのことは、両国の家父長的ジェンダー観を示していると言っても良いだろう。

映画『バード』に見られた90年代初めの統一言説とジェンダー役割のナラティブがその前後でどのように変化しているのかについては、今後の研究の中で明らかにしてゆきたい。

## 参考文献

코리아語文献 (著者名ㄱㄴㅇㄹㄷㄹ順)

김현숙 (キム・ヒョンスク) 「북한소설에 나타난 여성인물 형상화의 의미」 이화여자대학교 한국여성연구원 제2차 통일문제학술세미나 자료집 『북한문화와 여성생활』 1994年 (「北韓小説に表れた女性人物形象化の意味」 梨花女子大学校韓国女性研究院第2次統一問題學術セミナー資料集 『北韓文學と女性生活』).

—— 「문학에서 여성 읽기」 이화여자대학교 한국여성연구원 엮음 『통일과 여성-북한 여성의 삶-』 이화여자대학교출판부 2001年 (金ヒョンスク 「文學における女性を読む」 梨花女子大学校韓国女性研究院編 『統一と女性-北韓女性の生活-』 梨花女子大学校出版部).

림종상 「쇠찌르레기-취재수첩을 펼쳐놓고」 『조선문학』 1990年 3月号 (林ジョンサン 「シベリアムクドリ-取材手帳を開きつつ」 『朝鮮文學』)

림종상 외 『북한 우수 단편선 I 쇠찌르레기』 살림터 1993年 (林ジョンサン他 『北韓優秀短編選 I 시베리아ムクドリ』サルリムト).

손광수 (ソン・グァンス) 「작가 김세륜의 희극영화문학의 예술적특징」 『조선예술』 2002年 7号 (「作家金世崙の喜劇映画文學の藝術的特徴」 『朝鮮藝術』).

—— 「작가 김세륜이 개척한 특색 있는 상봉극작술」 『조선예술』

2002年 9号 (「作家金世崙が開拓した特色のある相逢劇作術」 『朝鮮藝術』).

—— 「화면에 비긴 민족분열의 비극적현실과 력사의 교훈-작가 김세륜

의 비극영화문학의 특징을 논함-』『조선예술』2003년 4호 (「画面に映し出された民族分裂の悲劇的現実と歴史の教訓—作家金世崙の悲劇映画文学の特徴を論じる—」『朝鮮芸術』).

‘아세아의 평화와 여성의 역할’ 서울토론회 준비위원회 『‘아세아의 평화와 여성의 역할’ 서울토론회 보고집 평화와 통일 향한 따스한 자매애』1992 (‘アジアの平和と女性の役割’ ソウル討論会準備委員会 『‘アジアの平和と女性の役割’ ソウル討論会報告集 平和と統一に向かう温かい姉妹愛』)

엔도 키미오 (遠藤公男) 지음, 정유진·이은옥 옮김 『아리랑의 파랑새- 조류학자 원홍구·원병오 부자 이야기』Cup&Cap, 2017년 (『アリランの青い鳥—鳥類学者元洪九・元炳昨父子の物語』).

이명자 (李ミョンジャ) 「김세륜론: 사회주의 원더랜드를 꿈꾸기- 유원지에서의 하루」 이화여자대학교통일학연구원 편 『북한 문학의 지형도』 이화여자대학교출판부, 2008년 (金世崙論: 社会主義ワンダーランドを夢見る—『遊園地での一日』) 梨花女子大学校統一学研究院編 『北韓文学の地形図』 梨花女子大学校出版部).

河柳美 (ハ・ユミ) 「비무장지대 생활 20년 새박사 元炳昨」 『北韓』1984년 7月号 (「非武装地帯生活20年 鳥学者 元炳昨」). 『朝鮮日報』(韓國紙) 2007년 3월 5일.

## 日本語文献

遠藤公男 (1984, 2013) 『アリランの青い鳥』(資) 垂井日之出印刷所出版事業部発行 (初版は講談社)。

「特報 徳間、博報堂、エフエム東京が狙う シネマビームプロジェクト 世界の“新人監督発掘計画”」 『日経エンタテイメント』1992年7月1日。

門間貴志（2012）『朝鮮民主主義人民共和国映画史—建国から現在までの全記録』現代書館。

山下英愛（2021）「韓国における北朝鮮女性研究」『ジェンダー史学』第17号。

山階芳麿「私の履歴書」公益財団法人山階鳥類研究所

([http://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/rirekisho/rirekisho\\_mokuji.html](http://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/rirekisho/rirekisho_mokuji.html))

『朝日新聞』1992年12月2日。

『河北新報』1966年5月14日。

[付記]

\* 謝辞：映像を提供して下さったローガン・リチャード教授、インタビューに応じて下さった小林正夫さん、李鳳宇さん、また、小林さんへのインタビューの機会を作って下さった平田賢一さんに心より感謝いたします。

\* 本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）課題番号17K02084及び21K12505の研究成果の一部である。